

英傑續三國誌傳

艾久十一卷

~ 13
3974
1



門へ13
號3974
卷

和漢
美立

續三國誌傳

知不足齋梓

五行を地よ配ごりん五倫のさゆり我はむ代の
 地外ちがいよ申うん浮うちら五帝ごていより五帝ごていの處ところを考かんへ
 目々めめ度御代ごだいの兆しるしもみ風千かぜち由村ゆむらを考かんへ
 百姓ひやくしやう多おほ力を考かんへ五穀ごこく熟じやくく五葉ごえふ五葉ごえふ
 さつらん水みづ中なかつ夫人ふじんは五衰ごすいくはみ戒ごういももては
 浮屠ぶと氏のし後ご壹いつ我われ平調へいぢう双調じゆうぢう美み存ぞん盤ばん涉せつの
 五個ごこ子こを舞ま舞ま架かの傳でんみ酒さけも深ふかぬ秋あき氏しと
 五章ごしやうを食くりずをを百ひやく弁べんの鶴つる羽う毛けは禰ねの五ご葉えふ

惟任滔天窮極
猖悖義軍一呼
熊罷俱護支體
分裂城池滅沒
雖有謀計安免
神罰



まゝふ甲斐とてたうんまじり

松より衆のいりをあてて

此哥後人武田滅亡の志ありといふ傳

説を信し禪理を愛し参劾の陳中

おのゝ幸去き生涯嚴刑のて人を

殺さるの多たも死後墓を掘り

石棺を造り諏訪の湖

密に沈む蜀の玄徳小比

三好修理大夫長慶

管領の家長將軍義晴公の弟代

至り足利家の武威に勢大を養

一時除く威を列侯の上は震

家細川を蔑如し天下の政務

を掌り後不義暗公を退

嫡男義輝公を征夷將軍とし

且茲に威を振ふて

始に將軍家すし勢微あり是

を以て

諸侯に於て一人も

く先なく自將軍家の補佐

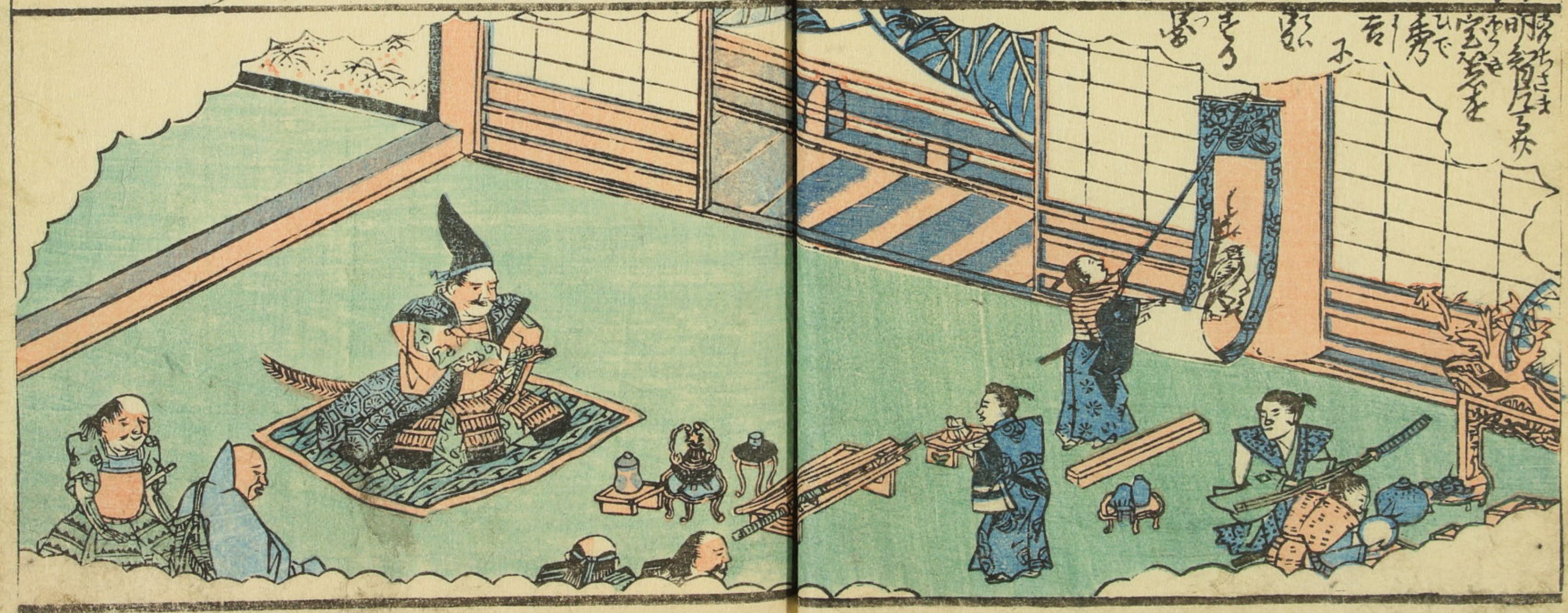
後松永のありし

を以て京都の守護



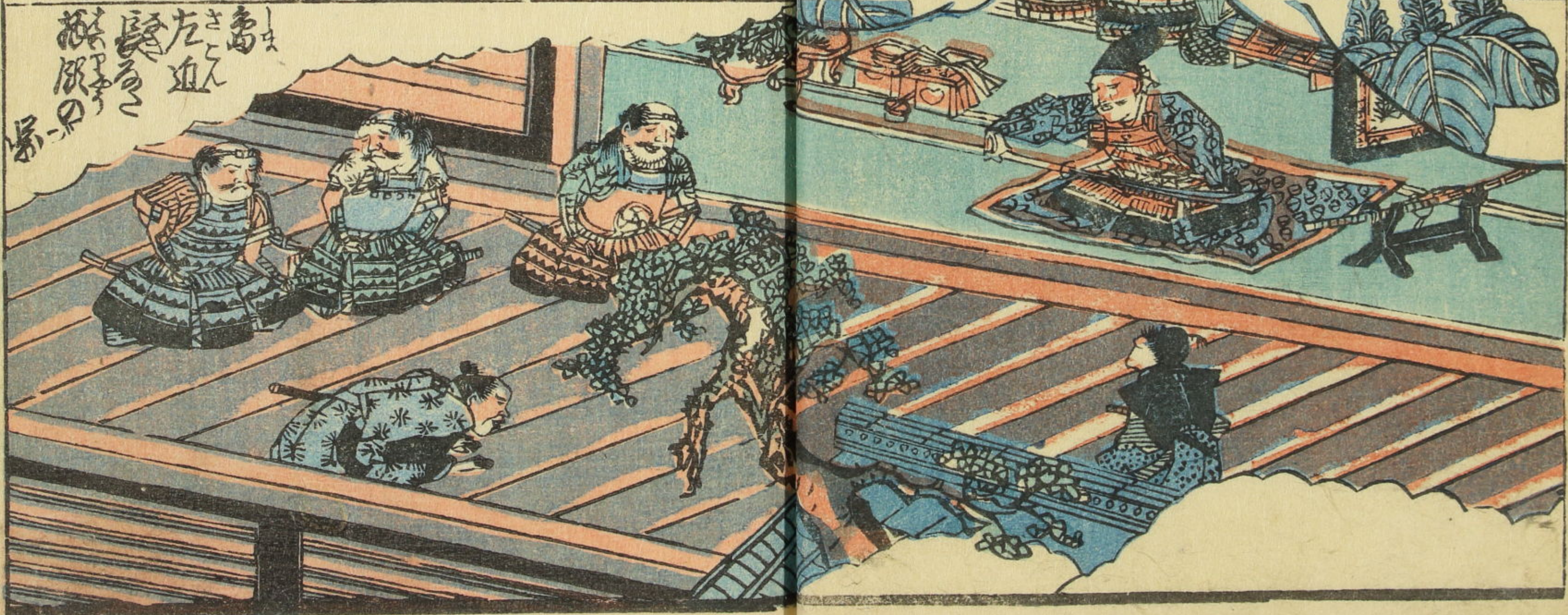
絶へず人々を心付く其
 らしき限りか
 ありあかき跡まのり水
 と京極門の跡よりひもかき
 あんとやきりりり此目松永毒酒
 を以て義長を害す同僚の列彦孫
 女中を殺しを知らずも導は威小
 思も敢て口外おのり老の昔昔曾
 て松永が陰謀を知らず病床おのり
 家督の事をいふ事より愛ゆ於て

松永が威勢益々強く十河民部が男
 義継をりつくと此の一族は日向
 守同下野守岩成主税二人を後見と
 して是をこの好の老臣と称し其後長
 慶が死後之老臣と討て幸は町
 御所お押寄鯨波を信じて攻入後不
 將軍義輝公を殺しむる時將軍
 御年三十歳嗚呼此目いさる日
 足利十二代のお軍倍臣がみん殺せり
 松永く泉下の鬼となりふ武運の末
 こそ悲しむる也耐義輝公の事



此吉野屋へ納くは物多しと云ふ
 として綿や包も宝物を矢倉より
 釣御(せ)ば秀以感涙を流しあつれ
 仁義の武士の形跡の跡を委細に
 言ふ及(と)頓ておのの宝を矢
 名軍使を以て秀吉小敷大御も
 光春長閑翁号が心底を慈歎一室に
 入るふやあはれ不劫圓行の刀に字は
 後の太刀茶研藤四郎吉光の腹巻奈
 良芝の茶入緋あどの水指無名は天目
 徽宗皇帝の香炉子鳥の香炉を

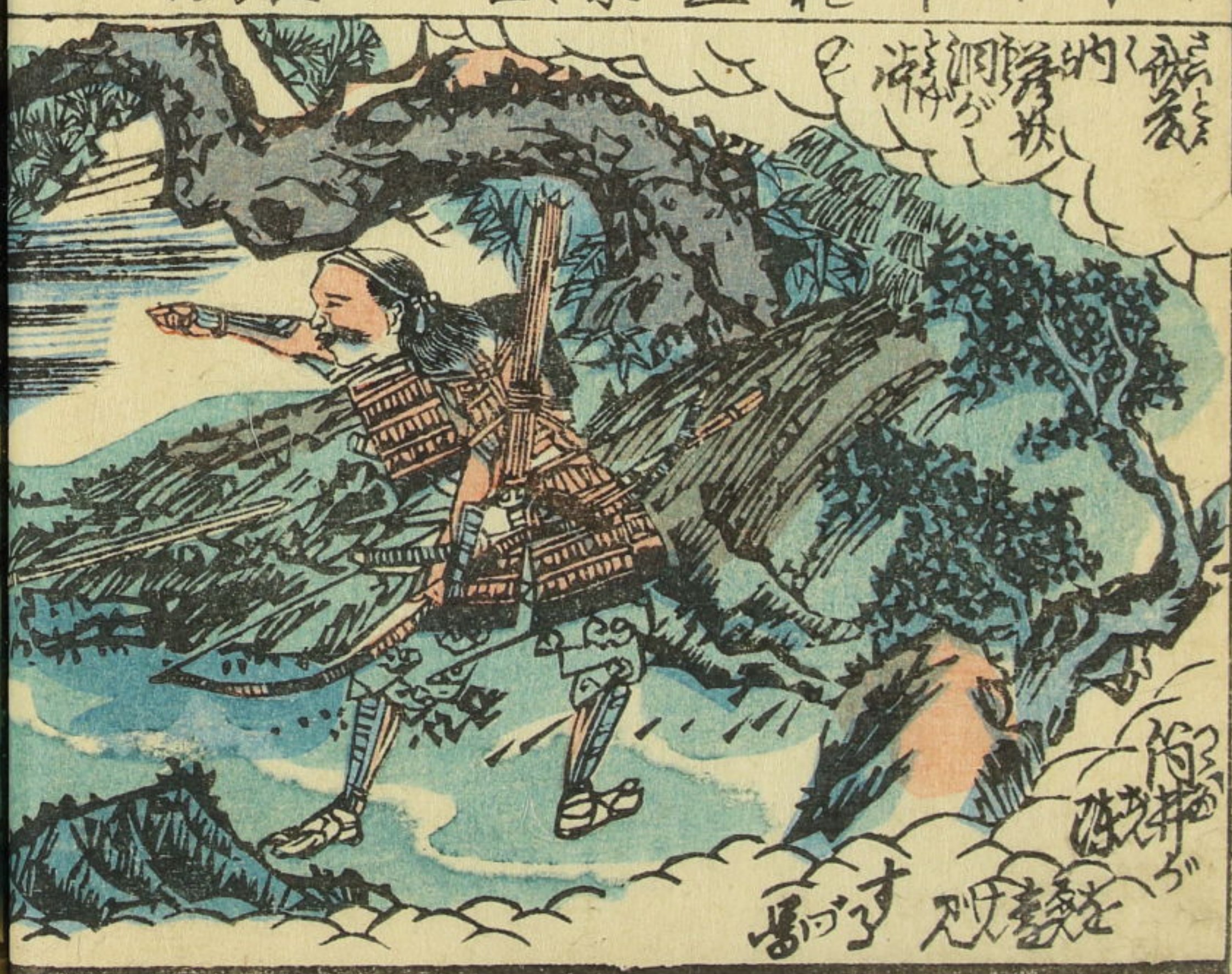
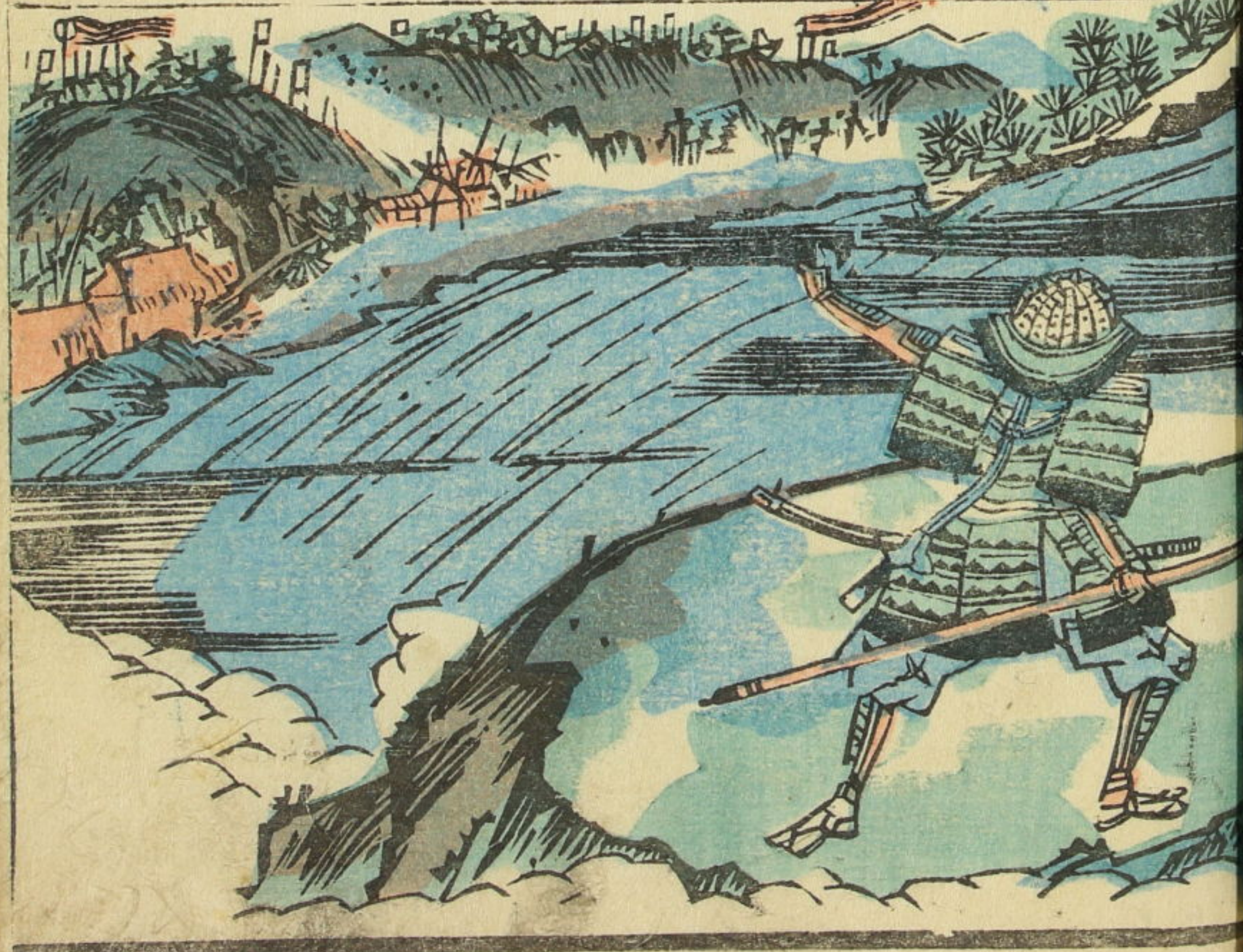
首と(世)中希多(と)き宝六十五品
 悉く目録小記(と)し(後)多く寄(り)押
 考(り)て(半)時(を)り戦(ひ)城(中)小
 引入(り)皆(れ)自(ら)救(り)て火(中)に(入)り
 失(り)つ(て)魏(の)司馬芝小比(と)し
 長九郎左衛門連(と)し
 高倉官の侍長各部信連(と)し後胤源
 頼朝公より能登屋を以て代(り)て(國)
 住(り)て國主富山の旗下に(属)し(當)
 時義則(と)代(り)て(家)運(を)表(し)家長(と)國
 人(を)至(り)人(を)退(け)し(互)に(集)と(戦)ひ(長)



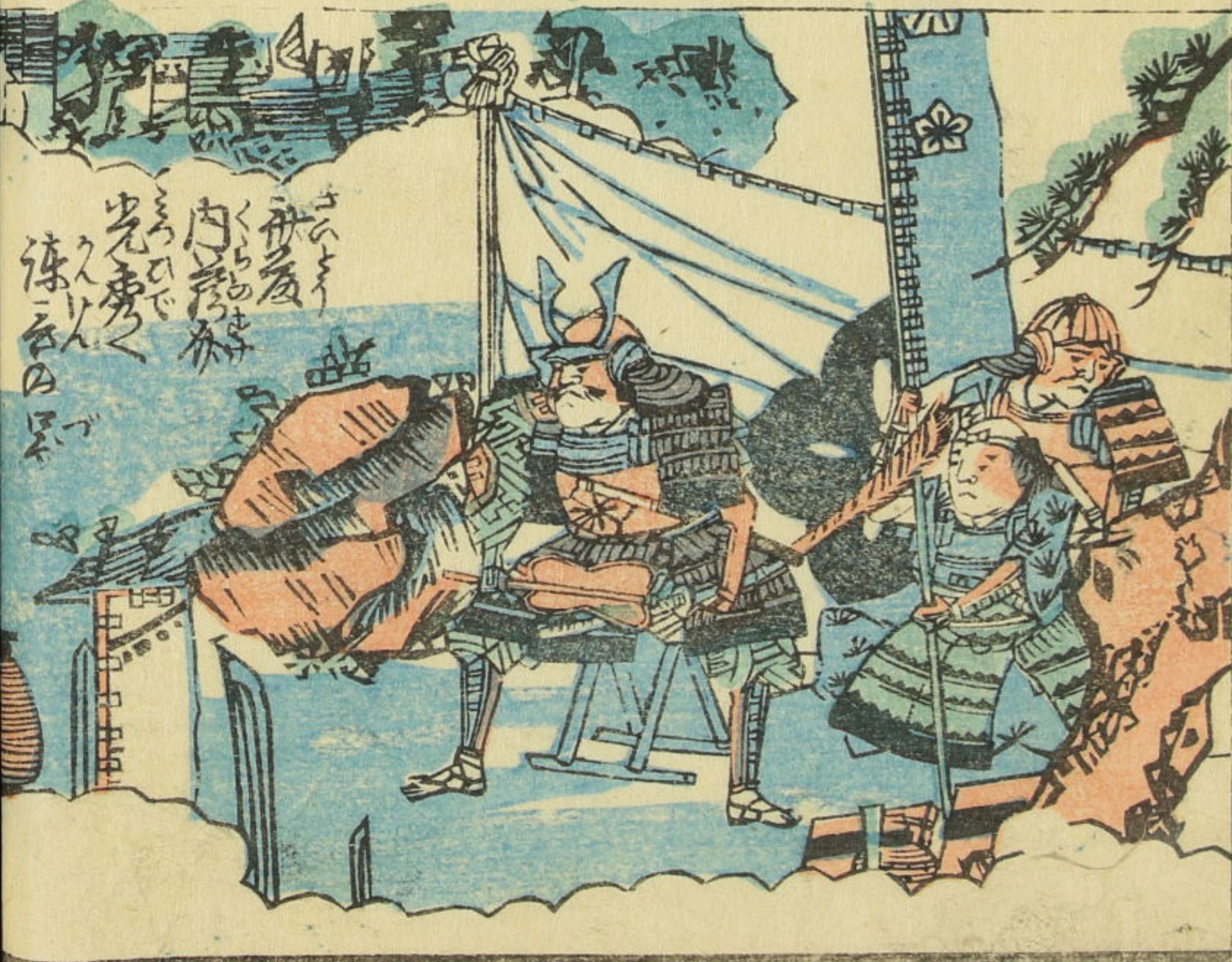
左衛門
 長九郎
 高倉官
 頼朝公

争ひ合戦一日も止りあらず中温
 井備前守三宅備後ち上杉の幕下
 又属連越ハ織田の旗下とあり敗年
 合戦をいひみづから連越武勇の老翁
 ハ救度の戦ハ勝利を濟く終不温并之
 宅之降一信長の幕下とあり有長家
 清感少く一多救の加増を賜り東田
 勝家ハ随ひ越中よち上杉家ハ
 大お長与一景運ととくも能登一渡海
 一上杉ハ随ひる老翁を責平ん
 爰ハ押寄彼下ハ攻結お戦あやと

能州上をトへと撥却と是よとて
 連越軍勢を率一能登一帰國し
 長与一と棚本の城ハ相戦ひ終不系
 連を討えく平均と魏于林おと
 本曾左馬頭義昌
 旭将軍源義仲の後胤信濃園本
 曾小住ハ武田信玄在世の時武田乃
 幕下ハ属一信玄が女を娶や武田家
 股肱の持あり信玄以後勝頼無道と
 初ハ年ハ謀役をまハ百姓を虐けぬ
 まハ義昌治くそを恨み跡ハト忽



野心をわたり東夷波の任人苗木
 久吉備尉に付く織田守の降参し
 人質を知りて無二の心を察す本曹
 が家入千村左京といふ者密に甲府へ
 走り義昌が叛心を告ぐ勝頼大に
 怒り一族左馬の信豊保治等が
 捕虜に七子入人して討つ義昌も
 舟碇の切絶は約受く一戦に退拂ひ
 勝利を得し魏華歌と云
 筒井順慶法師
 大和の大守明智光秀乃日比斬金の



内膳
 光秀
 徳吉の目

好むを以て中能寺より信長を越
 せり後継者大八郎を以てまひり
 其時諸君を集めてハ此度光秀
 信長を裁逆し天下を奪ふ是大逆
 命道の行路あり我織田の幕下小属
 未だ尾の約をあたはざるといふも
 光秀が不忠謀罪せざらんばあぐらに
 されども和局一國の主となり采番を
 得るも悪く光秀が吹捧のいふ
 事あり我爰を以て逆信と面々趣
 意をかきまひり人々を討つ一族を



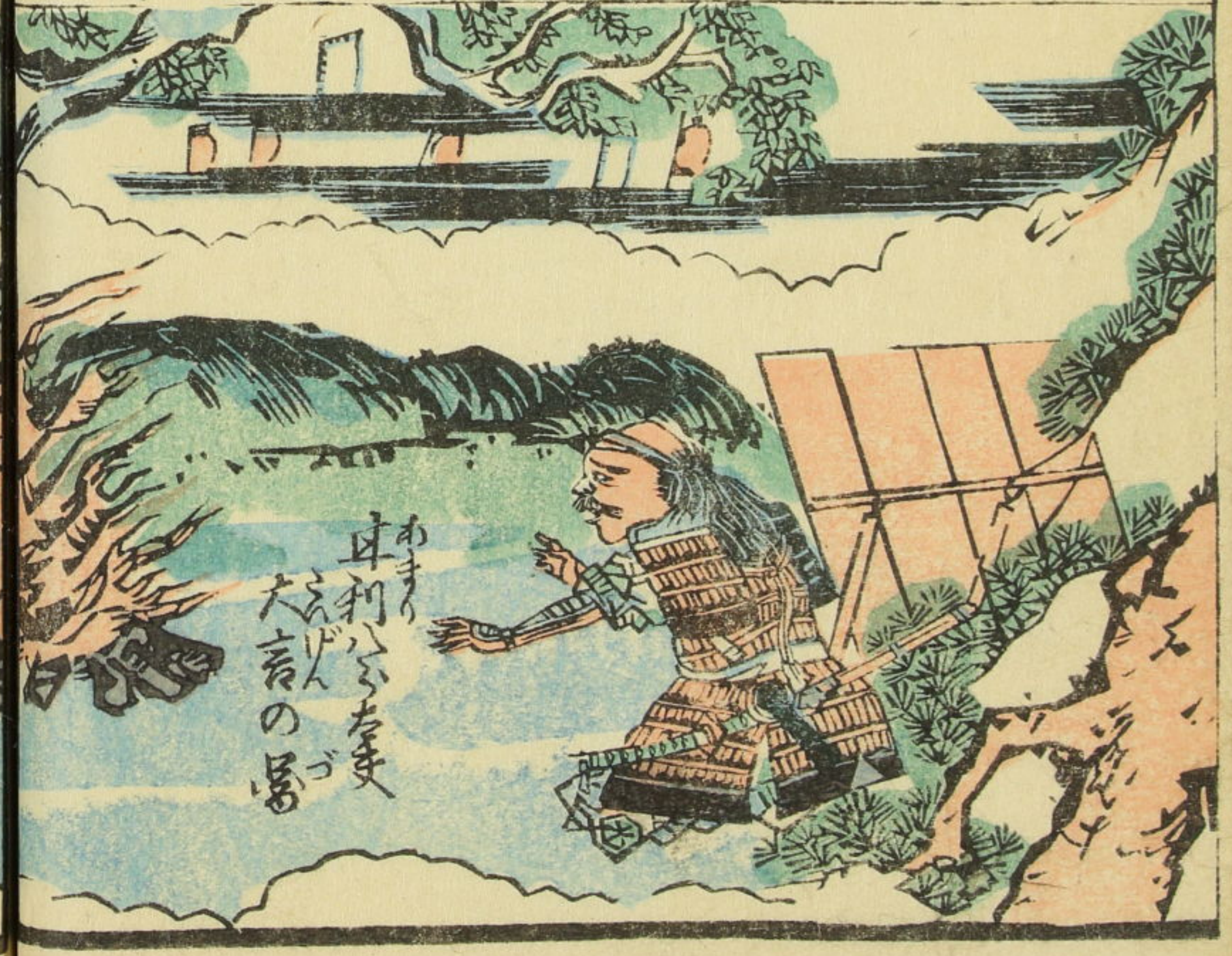
自らと答へて口を海へ
 彼の説を手にし時此席より取
 多小姓中西小次郎といふ者評談
 相談するも是非得失の事さうた
 をこそ評談後さういふわけやかくの
 ごとく理非歴然たる一語をさしと
 門家老の奇判断又迷ひ口を嚙
 扱へるも何するもはやと憚るやんが
 一座の人々氣色を換へいせれる
 小冠老がや余も聞捨ごとく罵
 且バ順々の制して愚者も千慮ふ



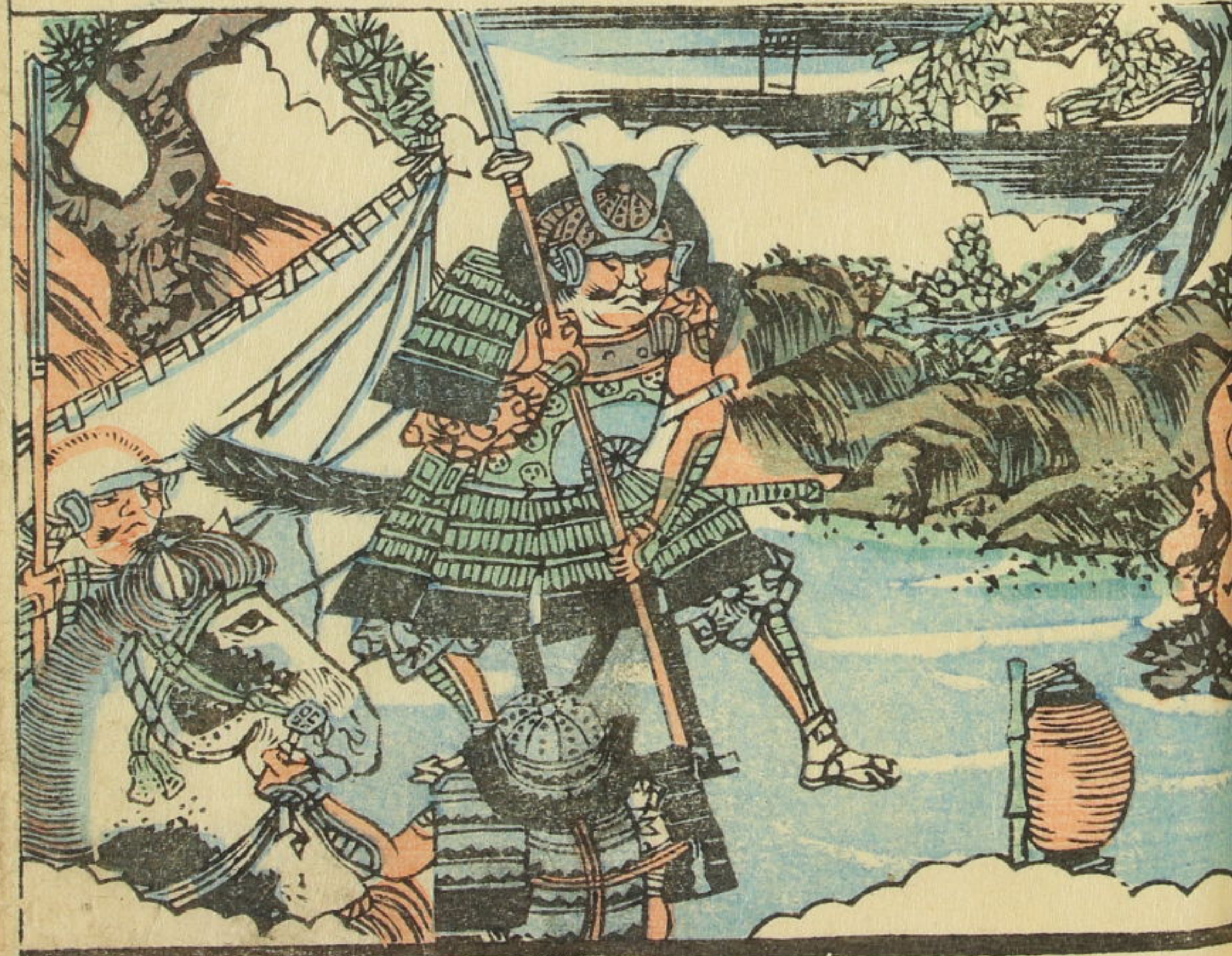
一得まともや汝が所存残さるる
 一くちまべりといふ中西爰よむ
 君の信大和を領さるる信長の賜と
 深を論ぜば真へるや汝も吹奏せ
 や海も吹奏せらるる其塞りしを
 通しし是を知て勅賞を与ふ
 老の君あり然るも君の恩を以て執
 連の老と比すべきや是論あり及ぶ
 朋友の交信を建する事を心ぞ憚



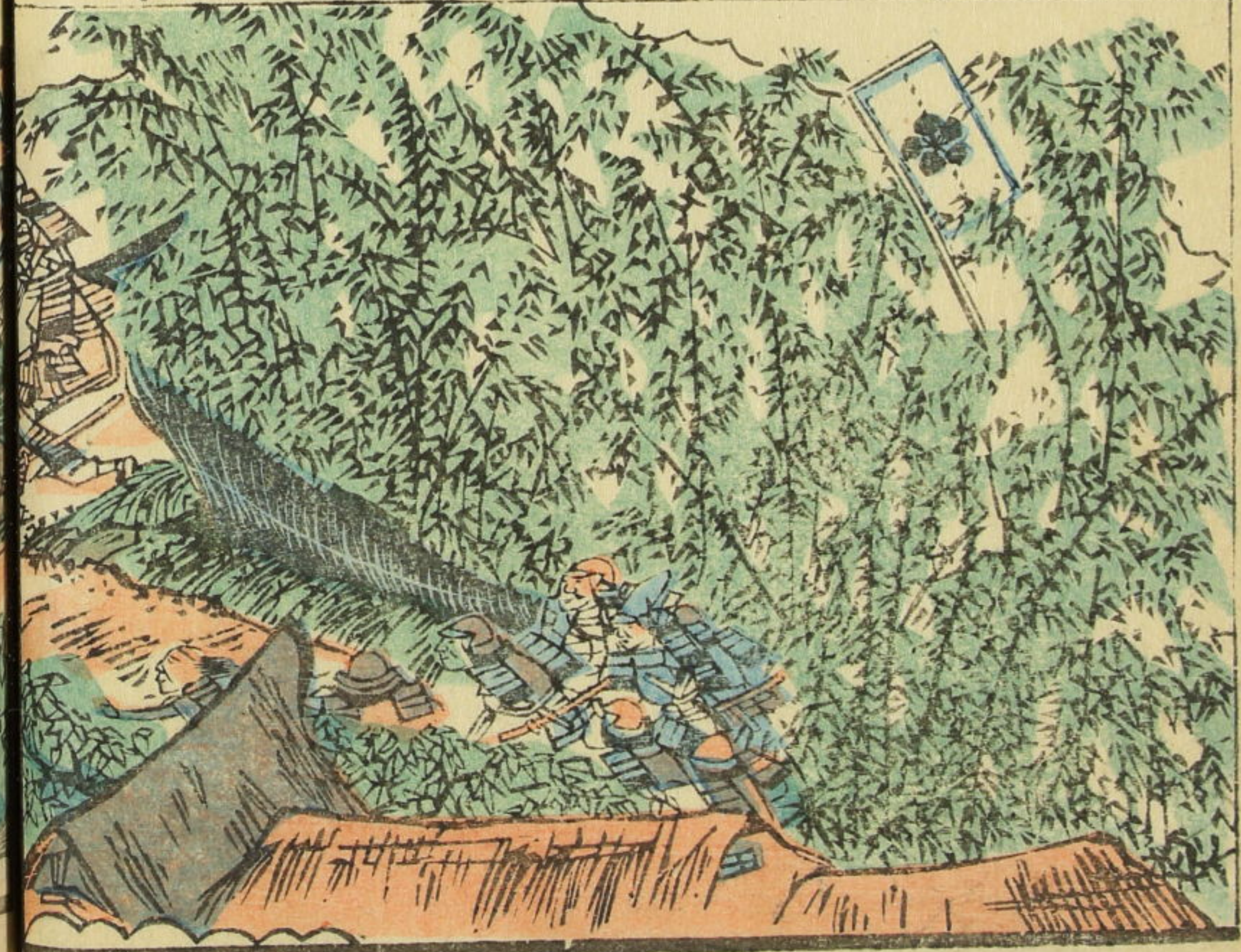
色あく迷々まじ順き掌を拍て大
 悦び汝がやも承悉く理小當まる我
 おか一人の童子小劣であるハ生涯の
 恥辱ふくそと評義そよ一ひせう時小
 松倉右近進こかて中々の先亮秀
 一味同心の区々有く使者を返り
 大軍を率い卒一城州八幡山へ出馬
 あり一彼地ハ究竟の要害なまは
 暫く在陣して世の形勢を見合
 先秀が使者を召知 先當座の賞



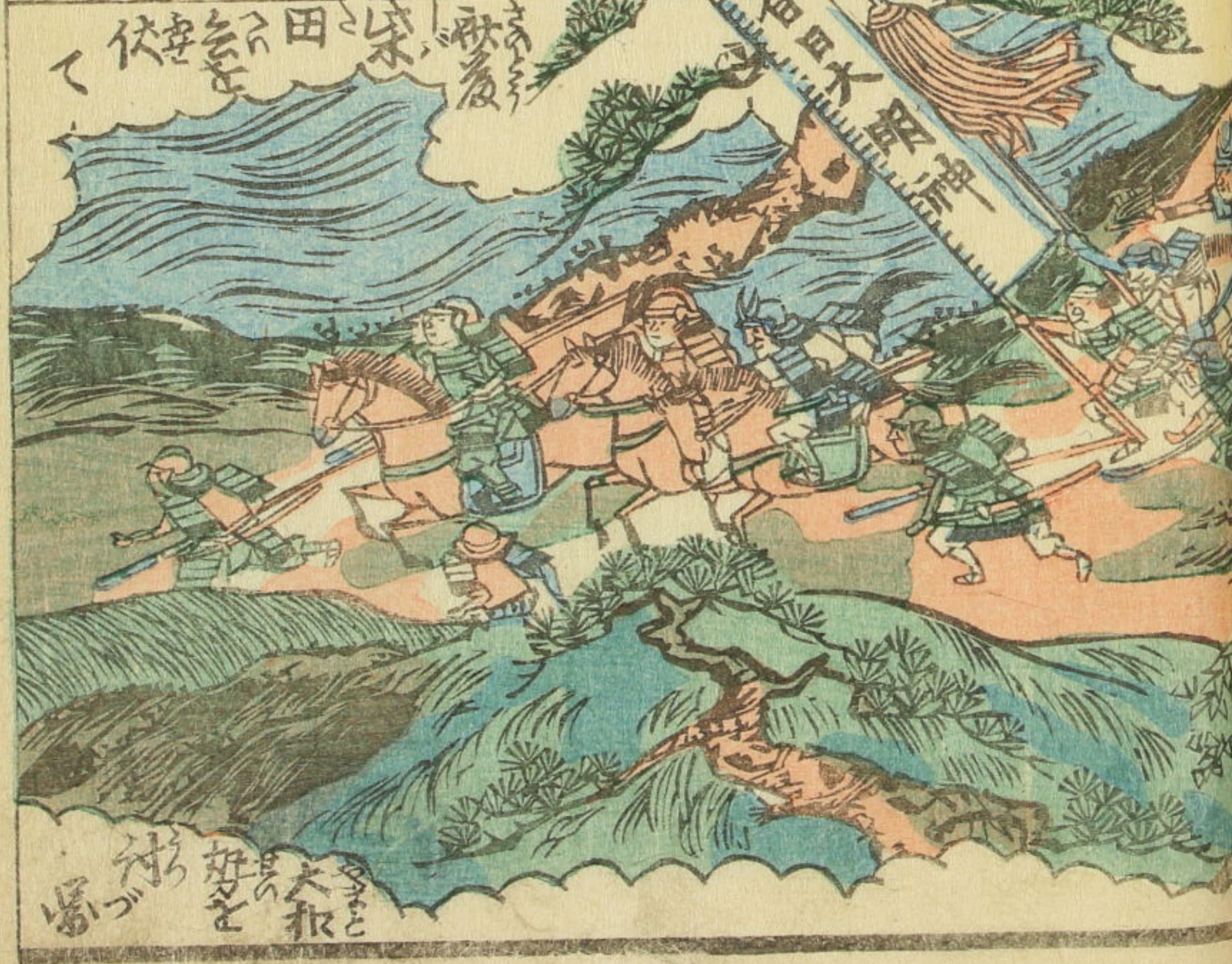
禄を与へ我先秀と回交深く一向隔
 心あり 幸よ都へ出馬一得方と食
 べしとて 敵者を都へ返りし筒井の
 本城より嫡子孫四郎定次を召し一
 一万餘騎を率い一八幡洞が作す
 着陣し陣を張明智へ森好之を
 案内しとて 先秀ハ内謀
 ありしと志し大内義隆に使者を以て
 洞が作筒井が陣へ兵糧酒肴を給ひ
 送る其旁を謝しとらり
 遼西の公孫瓚小喻ふ



嶋左近 友之
 簡井順孝が使者として尾ヶ崎郡
 秀吉の信へ事り先秀吉の上意を賞
 して秀吉左近を召て對面あり左近
 謙でや々のハ順孝又年來先秀吉の斷金
 の好あるが故に此度人使を遣して
 味方招くといふも豈大逆の叛臣
 ならず仁義の軍よりを引んや依て
 軍勢一万余騎洞谷峠まで出陣し
 美客の上國を相待り近日先秀と交
 戦の時敵軍は後より切崩し下間

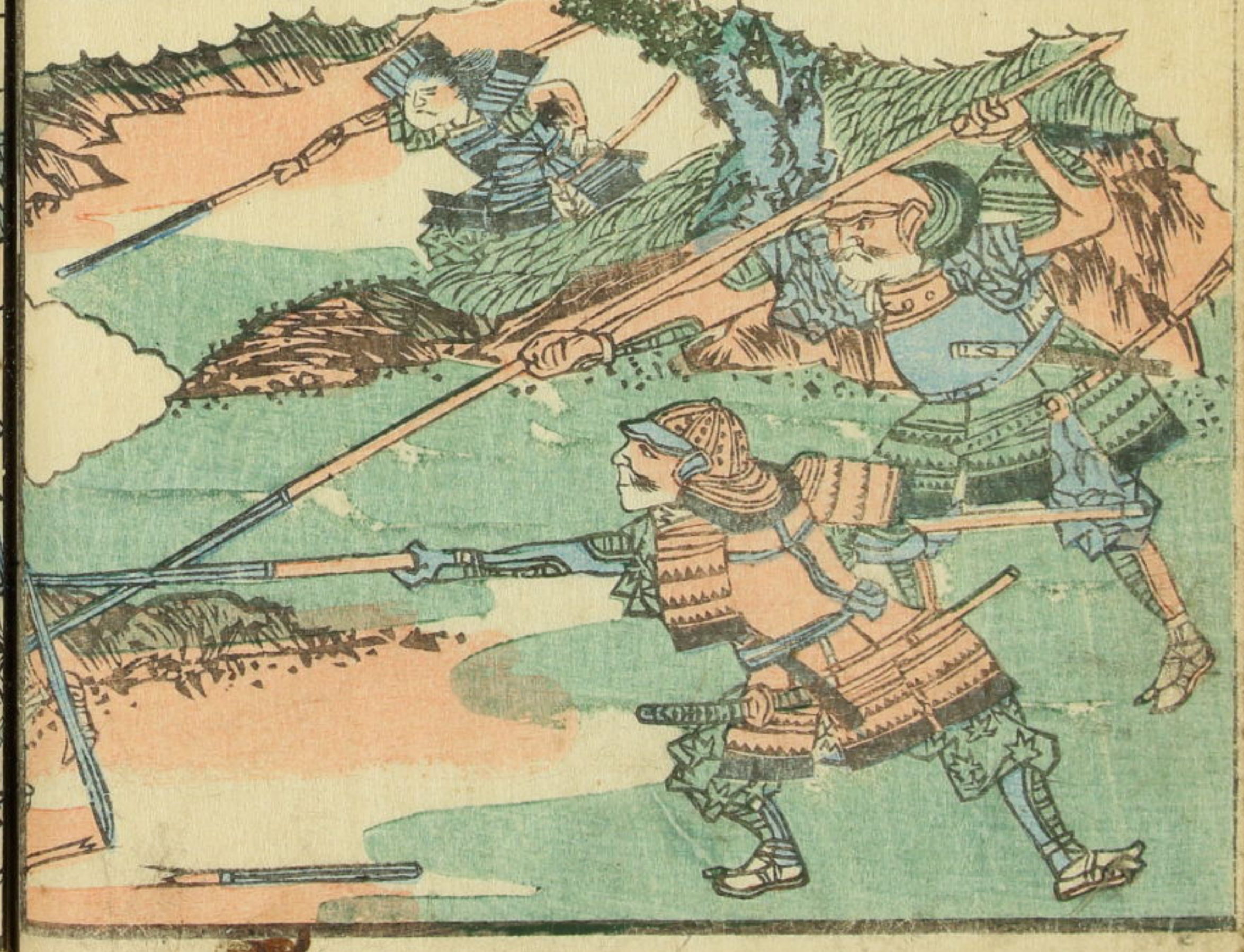


此旨を御聞申すに主として
 仕ると謀るべき大智の秀吉順孝
 が表裏の計と云ふも推察有るれ
 ども此時人心未定らば仮や簡井
 多勢ありて与力せんらば味方の英
 氣を益せんと思ふべきは怒と喜
 びの心を察し順慶の心配が馬く
 も満足あり汝ハ音申すなり簡井
 家の智勇は老よしも物を得ん
 べしと云ふまづら白柄銀の巻
 さらし小長刀をとりぬり此度順孝



大軍 西田 大軍

先をわけけ長刀ゆく名甘や
 と仰々長を頂戴し流石や洞く
 後年石田三成は仕六万
 石原は明更を泥中よりつゝ小
 かねひさの甚ききさる董卓李
 催張繡が股肱とたのじ賈誦比
 甘利八郎大夫
 高山の勇長山崎元一戦の時右近を
 刀の鞘を脱し林九は腰を無目
 閉く勇氣を盡し後將塩川伯耆
 曰き是又阿弥仁右衛門馬を立



させ後を突て何事も同じく床九よ
 兵刃未接する小八郎去吏は
 右近は初遇する未座ゆの居るが
 け時を前より来り跪きそや
 爰中兩義の決しきた事のは怒るが
 君の判ひを弄りなほとせよ山何
 事ぞといふ甘利や々の八君勇方智の名
 あるおのりまは遠國他家をいふ傳を
 求やく招きよせ言を賜りて恩顧
 事ごとく排りしごと況や後代相傳の家
 け子八君の城壁ともお成すべきまると

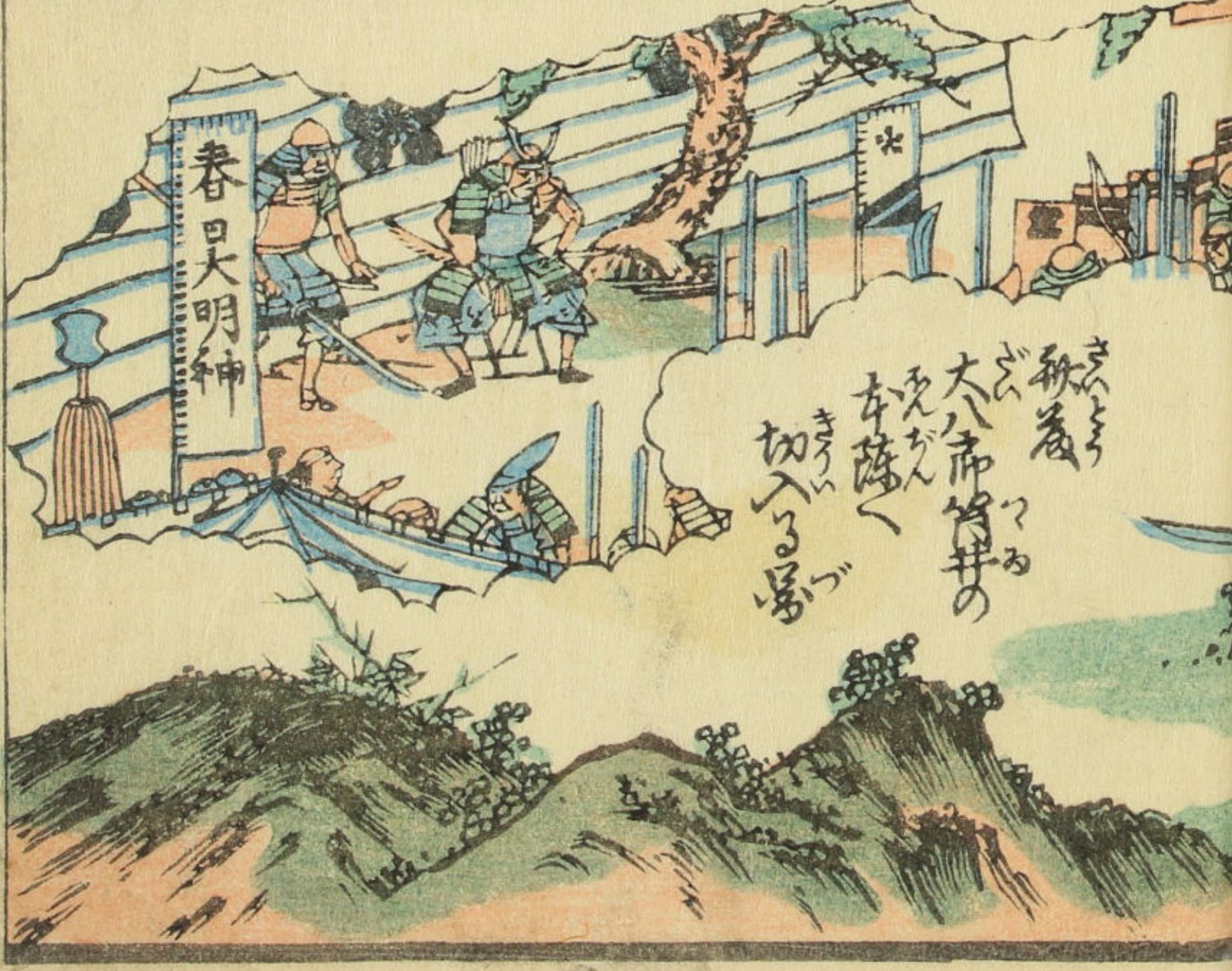


血戦の場
 田舎
 源氏
 忠臣

御用を付くまゝに人並に詞もあれ
 ぬべー某もおいて八人数あるめ体お捨
 てるはさせる御用の中も立まがたくと
 思ふふよりのてゑはさるふ某今敵を切
 陣を破る只今の合戦に御用おさる
 ころるての御目鏡も遠いそ不忠そ
 ひべー又鬼もふおまこじ先立臆痛
 をかまへは母ハ武士の名を失ひ先祖を
 汚しはるは是不孝そくは不忠と
 不孝との飛二の地何事ぞ言ひりんと
 柴が燃ひひくちと高山つゝ尻尾



刃く憎きものよゆのさやとと擽込
 一薙刀小く動くと刃をろが大事の
 事の小事味方は兵士を切捨んを
 不吉ちうと眠るごくとめそ敢て夜
 せむ時小早東をゆきおる敵合源
 近くるまば右近時分よと下知城
 傳へ人数を繰ゆ備をまむむ小方の
 先陣敵者肉筋ひ明智十右左衛門
 奥田の肉筋も同じく陣をまてゑん
 あ勢一回よえいぐおくと奥の善を上
 るとひくく鉄炮備の善卒備先を

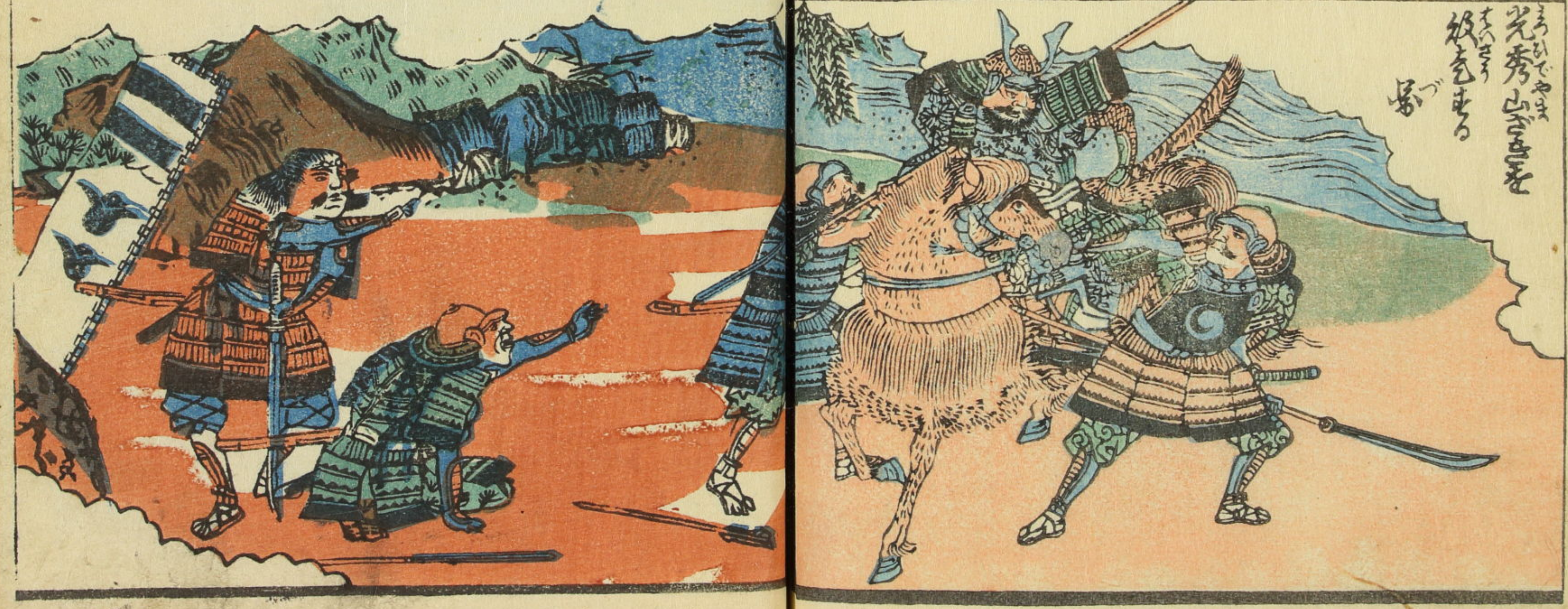


秋後
 大八市皆井の
 本陣へ
 切入る場

並べ双方より一団お放しつる者
 山岳を動し硝の煙々々々のどく
 互小多年の煉兵をまじり槍をりや
 ようりけん忽ち招き合突りし戦の
 花の蒼煙ひくそぞ山後大合戦の
 高馬が馬の前より大音揚げたる不忠
 の罪ありとも拾ひ首中もけりもを
 補ひてついで我を並を所降せよ

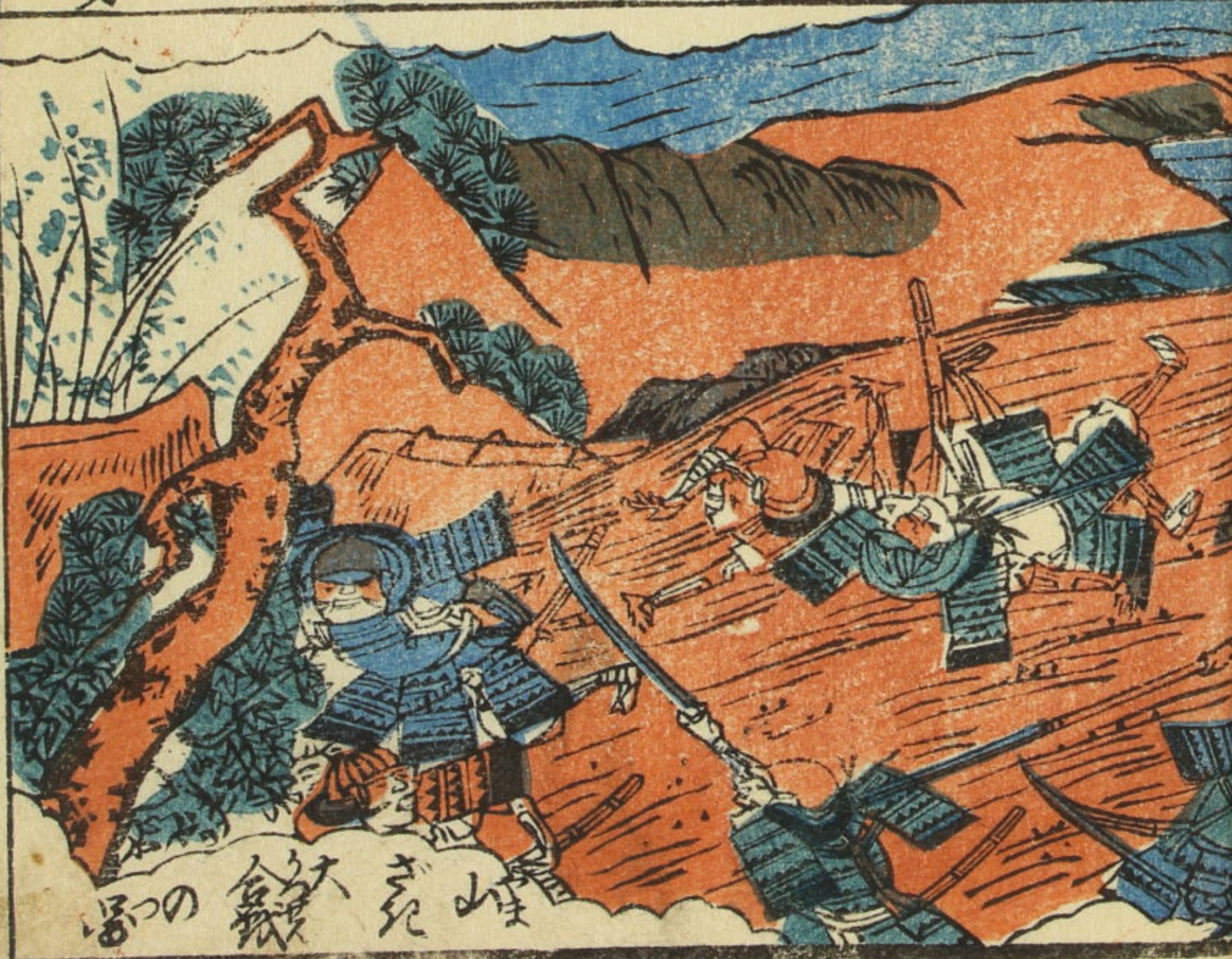
と云將て後炮の煙も付く組備の
 五も本否や一もあふれ出る煙除く
 敵の志有も及んば中へ槍をかり
 と投入て昇人最の先陣き山原れ
 一寸も甘利八郎と申といふハあるも
 と名ありあふむ汝若かぬれ念持後
 先と槍を合せ馬より下へ突落し
 首を取立上るを牙全槍は即兵
 御跡とて槍を上げて突来る甘利
 拔きの法兵のまじりしと打き
 付只一槍も突傷し二のどを取持

光秀山を
 坂をまる
 景



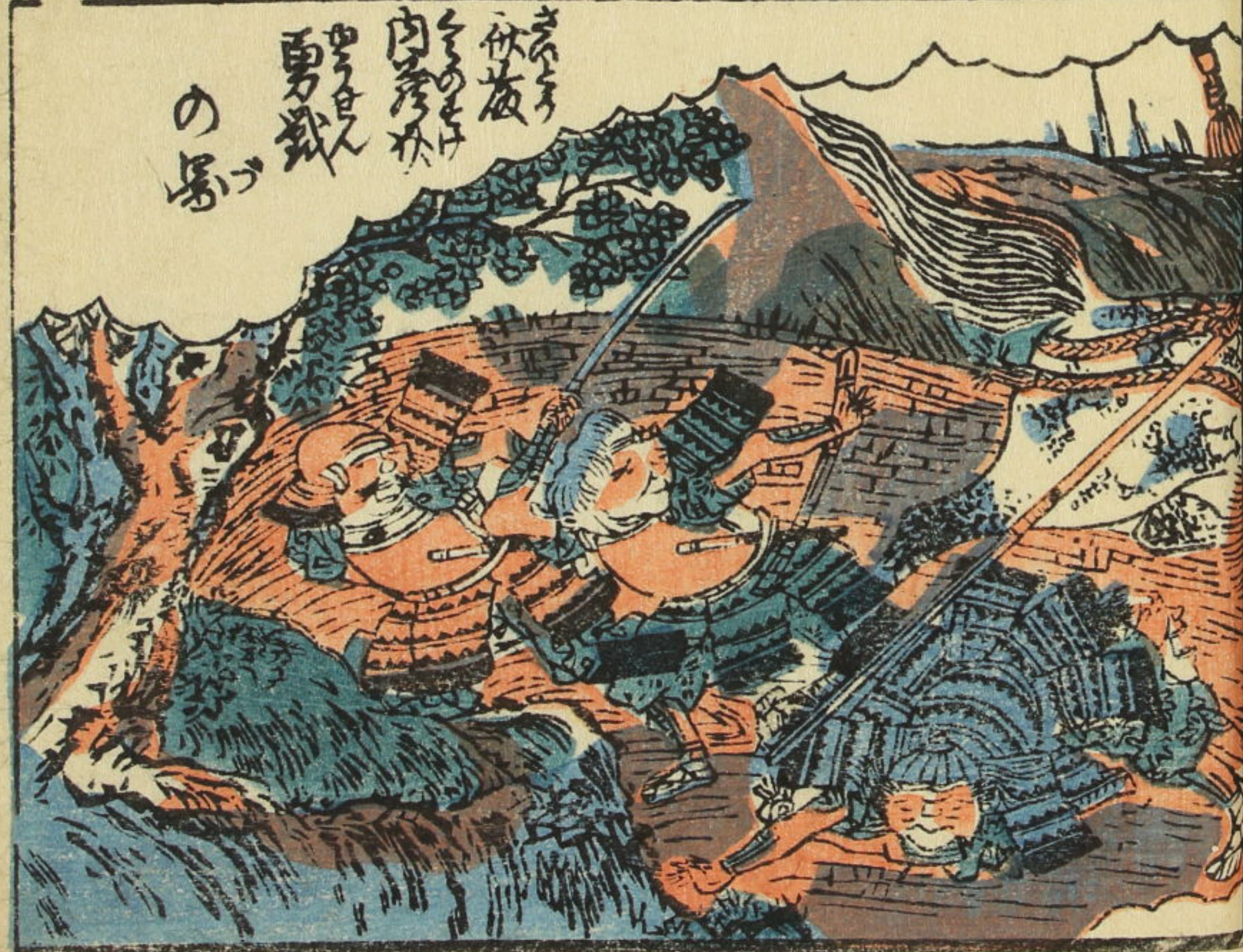
てま山の前は馳馬に逆も不志を致
 くと一歩後一歩首もはらとん
 右近曼をえても柄ありと曼曼
 夫士の逸條せりやも漫小尹の非を
 いと甘利が刃滅は不礼あり
 然もども其不禮をたやく我誤を
 かりりまらハ暗君之言も山が今日始
 末良持の位を得る甘利が法勇
 ちこそまらべ一蜀の馬岱も比
 柴田源左衛門
 柴田務家が片後分明智光春が妹

智惟任が耳目股肱と称し一勇志
 崎の一戦小幡者内藤女が謀計ゆ
 淀河院の教養小埋伏し今やくと
 待居りて又時向井れ先勢をす
 やりて一度は事と成るるは弓矢絶
 ひしと打ち火烟の中より陣を作
 切られればひびけり大和勢小田切
 本陣小泉守右往九柱は切崩され手
 負死人二百余人敵軍を成敗し敗走
 二陣飯田井上備を破り関のありを
 合せ自ら先登し挑戦ふ柴田父子勇



震いおきし方より播磨令を擧げて
 くるされども敵の大軍味方ハ小勢介も
 二度目の戦ひなまハ討つ先救を先
 び源田井上の二人柴田を目掛け切
 かまへば源左衛門あはれを合せき
 二戦ひ一が海に二下不負く既ハ危
 く見えろろあはれ齋藤大八郎一と人
 とんと喚いて打つわり切先より火突
 をおろく必死より悪戦すれハ坂田
 井上のあ人百人討つて敗走し柴
 田は負あがりも打退りし後を取て

七弦を突て落し鎧の穂先も突折
 めまへハ大刀抜く切く也る井上を突
 真壁と九郎長刀を以て救はさんと
 飛来しをわたり付入て志保右
 の腕を切落しとて首を
 を敵に寄く両方より四面を突
 子の忠義一とあはれ地身り群る敵を
 切つて父を救つて取りて此時惟任
 方惣坂軍とあはれ先秀馬上とて敵
 討死の時とて事なしてを敵中ハ
 猛入んとて比回帯刀進士作なまつ



勇戦
 内務
 の場

溝尾庄を捕らるるの誓ふはさうく津植
 高野の合戦の勝負ハ其時の運小依
 まう始終の利を大将とて其の詮と
 するや先勝龍寺の城より退た
 るひ坂本亮山の勢を合せてきりて
 恥辱を雪ぎさうくと馬の口をひき
 ハ先秀怒り死をさう死すま討死
 せられ死に勝る恥ありとや此を
 引んとて名をた者の手ふかり悪
 名を後世に残さんとして武士の恥を
 是非討死とてひ定められ退く事じ

と争ふふは後節述ふ一多は勢
 其一文字の近未まはバ大将とて旗
 本の勇士何まの敵をこれをもまバ
 柴田父子後升舟をきり後兼一成
 池来り作不誓ひすうく涙を流し
 こハ口惜手は形勢かろ乱軍の中
 切死するハ倍臣のち子業をそは苟も
 將軍職は任せしむるも是は法身
 爰して討死かんごの誓ひをせし
 某討死はらんきうていんも此一事
 心もあうも勢引上をまてふし思



明細
 士流左馬
 死の場

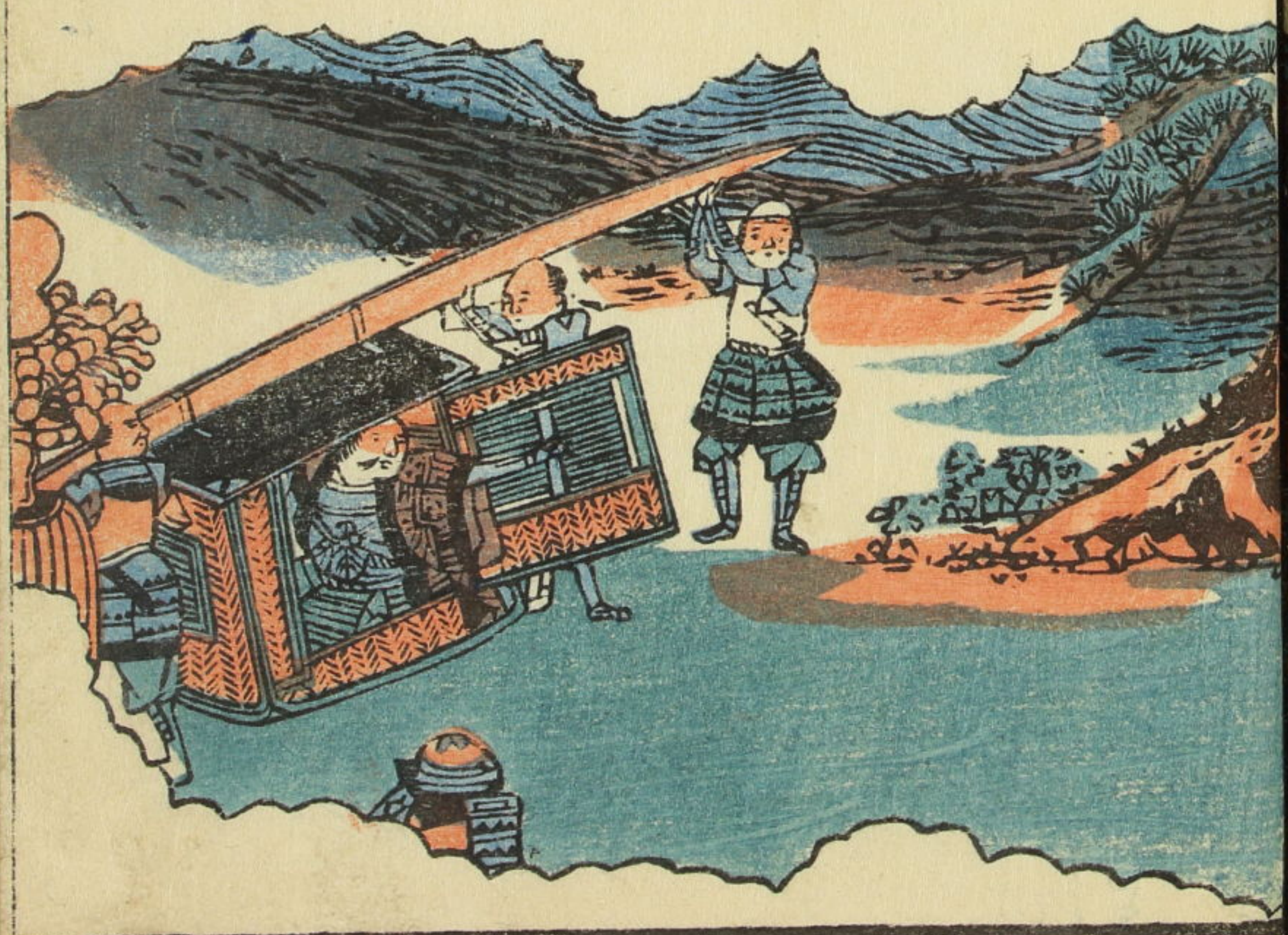
有る御討死を止めしむるはけまの
 今此上の事やいふは以場は不肖なり
 とも某父のあまうせ近習の勇士を召
 きて下りて勝徳寺の城まで御討死ある
 べしといひ捨て敵執力も近入七頭八倒
 相戦ひ不残討死なりある鉅鹿
 の田豊はばは
 齋藤大八郎利次
 山崎の合戦は向井を押へて
 源左衛門と兵の堤の薩は埋伏し大
 和勢をまじりて打破り卒にむす

討死し生かす者ハ向井の旗ハ隔れ
 只一人とありて今日を限り
 名はさし事あるまはるも
 日比の別力好む大志力も向あが
 當をまじりて立一人の
 ありて八境もお落し草摺も
 列名も大童も成る戦ひも
 順芳と刺運へて死に乱髪を
 ありけ首一抱て
 順慶と平右衛門
 と名あり鳩丸近ハ最前より敢



敵と戦ひば不意の難もあはれ救ん
 と傷は扱入居りしにが妙なるある
 をかんく声なきに安近付のいけ者
 大八身とてさうかろひ六嶋九近ある
 ぞゆきし先も秀吉より賜つる羅
 刀振上付く毎にバ汝者見頭と
 口懐と持てる首を投捨てし見系
 と大出方ありし中時針おひびく大八
 即ち負傷す遠くを逃れしに
 此時九近も二下とて首を負し
 友之ちりしせし順そが命危ふるま

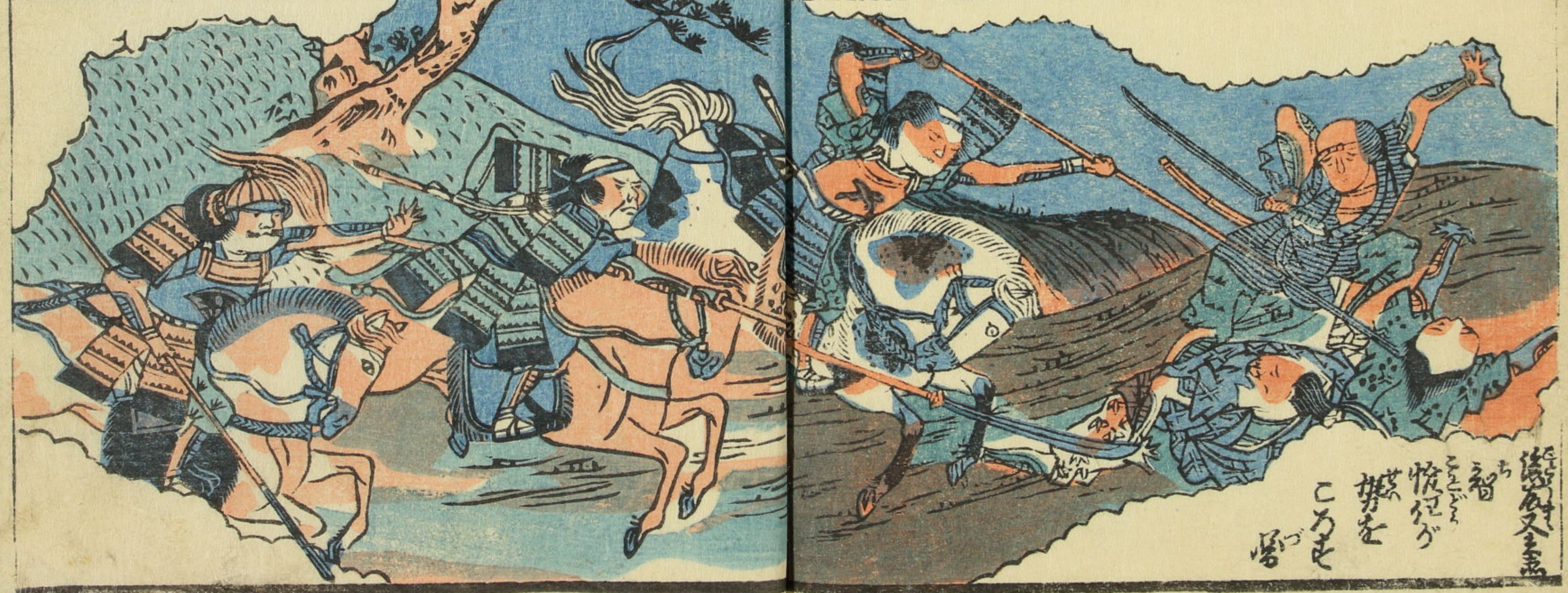
智勇の士は誠の有跡と家の宝あり
 魏郡の審配の喩ふ
 明石儀大夫
 惟任の母目の功に四五天とせし先秀
 が命を受尼う後埋伏し但守一務
 秀吉を退けしに死して本道あり
 羽柴が勢を防んと士卒を下知
 一々拒へし如し黒田の勇将後友又兵
 糸毛利太兵衛泰柄若き先進
 五十人の馬武者こそ歩行立の惟任
 勢まじくふりけしに義大夫勇を



申河の
 大切と
 謝
 星

震をて戦やしくいとも今敵對叶ひ
 くる幸うとて切わけ廣徳寺へ馳
 初るれ門前小田屋天が屍集ふ滌て
 倒まるとり南無之空味方の兵一人も
 活る者なく注進をへま老をまれば秀
 吉も不意を討てつらんすも計がじ
 と衣敷を脱捨解ふ多り田の中を
 潜り泥まみまき漸進まは涼の城よ
 来り秀吉小對面へまきまはひつ仕
 損とくまや汝が件氣まきとるま
 々まはさんい君の奇計的也秀吉

口一誘尼が傍へ近來り我々七十余人
 軍方より取巻付べりしを秀吉馬
 を飛へ廣徳寺とつりし禪院へ迹込
 一小田屋天は後へ追り某ハ追り馳
 来り秀吉が從兵加右衛門勘十郎を
 支へ戦ふまき小黒田中川まき大勢
 を以て五圍と七十余人の從兵を
 討死し割田屋天も敵はあらず
 秀吉が死生をわかれまき其も討死
 せむりりしるも大事の注進する者
 かつは清もまは遠もやせんと惜うぬ



徳川又志
 智
 懐仁が
 旗を
 ころま
 喝

命を合じ 逃るゆゑの先秀が
 怒るも 汝が忠を今も 誠
 生に難く 死に安し 大勢を切拵
 勤を励むと 腰刀をさし 義
 大夫有難く 涙あぐり 退きたるが
 とも 大事を誤り 此上の事や
 其夜腹を切て 死
 辞せし 和ら 一を以て 先秀の忠
 魏の楊脩に 喩ふ

